英文学史提（卅九年記迄）

ワーヅワース

ニゼチ研究

本間文庫
文庫 14
A111
6

英文學史

文庫14
A111
6

英文学史綱目

第一 緒言

第二 ローマンチシズム

第三 英詩壇概略 — Georgian Era

第四 英詩壇概略 — Victorian Era

第五 重なる詩人及著作

第六 英の小説壇概況

近世英文学史（卅九年九月十三日より）

第一、緒言

茲に近世とするのは十九世紀を指すのと同論です、前年なぞでは此の論義も一種の回遷移的諸段にして見て行つたが、其一を其の後、各部の特殊研究に入ることに、うまく行かず一般研究の一般研究であつて終つて、よつて今年は一般研究を主に習つて特殊研究に入りたいと思ふ。

①十九世紀英文学史は数年来は限りもなく出来て、普通の英文

(2)

学史が先づ其の主なる何れか英文学史として之を見せねばならぬ、中にも佛のテーヌ Taine の英文学史、英のセーンツベリー Saintsbury の英文学史 まで小さくもいけれども Brooke の ~~[illegible]~~ 英文学などはオーソリチーの重なるものである。又名家の二三の特殊研究、論評、伝についての論文等も限りなくある。今 ~~[illegible]~~ 二三の書ら十九世紀英文学に関した ~~[illegible]~~ 書を挙げれば

(a) "A History of English Romanticism in the 19th Century" by Beers. (学校にあり)

(b) Main Currents in 19th Century Literature III The Naturalism in England. by Brandes.

(c) Victorian Poets — by Sharp (学校にあり)

(d) Victorian Poets by Stedman (学校にあり)

(e) Victorian Literature and the Interpretation of Literature. by Dowden (学校にあり)

(f) Victorian Literature by Shorter (学校にあり)

などが手近なものである。

第二 ローマンチシズム

十九世紀初めの欧州の文藝はどれを指しても所謂ローマンチシズムで幕を開けたといふことは前年の(欧文学史の)講義で言つて置いたである。英国も其の数には洩れぬ。ローマンチシズムとクラシシズムとの対照及び其の意義は之まで前年の講義で述べて置いたと信ずるが要するに十八世紀の古典主義に対する抑[illegible]として感情主義、[illegible]

④

義、詩人的自然主義に立つてのかけ聲である、而して其派の
の文壇が此の（思想界の）革命を起した結果状態を示すのが~~即~~
十九世紀英文學史の發端である。
クラシシズムが常に人間の本質を修飾した形であるのに對して革
命を起して其の修飾をかなぐり捨てやうとする一種の運動を
強く叫んでゐたロマンチシズムとなる之はローマンチシズムの起きた後の人
がクラシシズムに不満を抱くに至る起りでなくてはならぬ、英の
十八世紀末詩[illegible]ポープ之派の全盛であつて、遂には氣運を起
したのは~~[illegible]~~第一は人間が之れに飽くたる自然の順であつた
のでなくてはならぬ。第二は物質方面の變動即ち戦争と
いふものが思想を早めるに於て~~[illegible]~~アメリカ独立戦争
路易[illegible]の治世中、歐州にも佛蘭西大革命、此の上大なる變

(5)

ゲーテの時の思想界を動かしたことの大なるは到底論じ切れない程であつたに相違ない。ワーヅワースでもコールリッヂでも、ローマンチシズムの先鋒は皆氏の大勢に刺戟せられた。而して此思想の流れである。此は独乙で最も早くロマンチシズム（僅りに之を仏の影響とすれば）に於て動き気運の動いて来たのSturm und Drangの代表である Goetheの Leiden des jungen ~~[illegible]~~ Werther が1774年に出て居る。之が既にロマンチシズムの始まつた記である。然らば英国でワーヅワースやコールリッヂが~~[illegible]~~ロマンチシズムを発表し始めたのは1793年即ち次のリリカル・バラッヅの出る頃で、まだ一寸二十年許り後れて居る。まして、コールリッヂでもスコットでも当時既に独乙の文学を翻訳したり

コールリッヂは独乙文学を研

(6)

完したり然して要ずれに立ち離れて思惟の流れへの明らかな記録である。之がローマ千年王国を刺戟のしたのは如何までもない。

(7)

第三 英の詩壇概観 — Georgian Era

近代英国の文壇は第十八世紀の末から十九世紀の前半にかけてと十九世紀の中葉から後半にかけてとを二大別することが出来る、前者は所謂クラシシズムの反動時代で、第二はローマンチシズムが更に変化を帯びて来た時代、及び其の末葉から後継 第三は現在である、之れを常例の如く呼べば所謂 Georgian Era, Victorian Era, Edwardian Era となる。之れを先づ詩歌小説、評論、劇等(四)方面に亘って概括を述べて了って各部の特殊の研究に移らう

第十九世紀の初期に於いて最も著しく新文藝の気勢を示したのは詩精の上で中詩歌に若くはない、されば之れ自然研究の

(8)

第一に来るべきである。十九世紀の前期詩壇は実は夫の湖畔詩人 Lake Poets と呼ばれし Wordsworth、Coleridge、Southey の三人とスコットランドの Scott を以て開くのであるが、然しは前年頃からの詩義の系統から見て必ず一期潮流は夫の十八世紀の後半の末を代表するセーンツベリーの所謂四大詩人 Cowper, Crabbe, Blake, Burns 中に求Cowper, Burns 殊に Burns に於けるロマンチシズムの萌芽は已に精細なる結合せられて居る。然るに1798年初めて Wordsworth と Coleridge との合著にかゝる夫の名高き Lyrical Ballads と既者詩集の出版と共に明日に此の丞のラうとなんつ標

(8) 詩を文字で解釈する大体の範囲に於ても此の変遷に於ける趣味が起らしめるといふは形式の採擇

⑨

持をした[illegible]バーンスを此のワーヅヴォルトの前駆とし湖畔詩人を
其の~~[illegible]~~開拓者とすればこれを[illegible]とさうまで行か
しあ~~[illegible]~~て気味のある
のは次いで来る一群の国家派の詩人である。即ち彼のByron・
Shelley・Keats の三詩人時代である。~~[illegible]~~
~~[illegible]~~此の湖畔詩人と三文人~~[illegible]~~との時代を総称してGeorgian
Era と称するとすればそれがGeorge 三世の長い治世の後George
四世の代となつてからが十八世紀の終りから十九世紀の前半の一
~~[illegible]~~ゼネレーションで即ち千八百三四十年頃までゞある。ヴィクトリア
3 女皇の即位は千八百三十七年である。文学の[illegible] Era を代表する
テニスン・ブラウニング等の~~[illegible]~~傑作を出しその他の点で

(10)

スコットの死も此頃で、又ペンコースト氏に始へられ英国に始めて鉄道
が出来、又ライエルの地質学原理が出て科学界の先声となってこれも
此の頃であって非常に日新の智識に世を新鮮にしたから英傑せ
られる。~~[illegible]~~ 此将に十九世紀となるのが
始メて四十年の草創期から次の太平の世即ち純なる世紀
の自覚の定まって来る時代に入る入口はこれであるが、ヴィクトリア朝
は~~[illegible]~~した時代で三期に分れてジョージ期は動揺革命の時代で
あるといわれしかして、一方社会上の出来事からいっても
此の期の前頃から夫のツラファルガーの大戦とかアメリカ戦争
の大戦とかウオタールーの大戦とかいう異常に民心を刺激
する社会の大事件が頻々起きて来て、ネルソンとかウェリントン

⑪

とかしよ若い勇士が出て来る、来る、壮士、自由、革命の叫びは野に
里外から反響して来る、如斯に各く人心の興が接せられてかは
東亜の縁に余りあると思ふ、文芸は畢竟此の国の我々直
接に編まれるものであるから、文化国の響を伝へる文芸が当時
草創の気と革命の気を帯びてわく／＼しておるのは当然で
あらゆる此のわく／＼した雰囲気が此期の浪期と遊ぶ所
であらう、

(12)

第四、英詩壇概観 一　Georgian Era

ジョージアンエーラ、即ち十九世紀上半の英国詩壇の特色が其の活動的、動揺不定的の草創期であるのに対して[illegible]後の即ち十九世紀中葉からのヴィクトリア期の文壇特に其の詩壇が純英国風、純十九世紀的である事は前に一言した。即ち定着した時代である点で英国近代文明の黄金時代ともいふべき時代である。而して此の期には實に詩が栄えるのみならず他の方面、即ち小説批評殊に小説が大に栄えた。此の事が寧ろ一方からいへば始まる意味であらう 即ちローマンチシズムとなるものが早く已に雲形を立たせ 甚しきは全部をまで見られ

(13)

る彼の自然主義乃至在来の写実主義が動異して来て、而して此の如き気運に遭遇する文学は詩よりもむしろ小説であるけれども詩までもない、勿論小説にも写実主義とローマンチシズムと両つながらあり得ること、詩にも同様であらうが、併し彼もはおのづから違ってくる 蓋し詩と詩ならざる文学との別は其の感応の情の懐抱のなし方によって分かれるものと云ふのが一番至当であらうと信ずる、形では決して分けられぬ、又感応の性質でも分けられぬ故に其の情の懐抱の形で分けられ得ず、即ち情が一種の絶に懐抱絶通になればおのづから其の不思議に内具するりこむの振動を外に伝へて来る。象歌に於いて踊りに於

(14)

いて聲性の重が認められる、之れを境目とするのである。即ち
リズムのついて来て以後の感情は詩である、従って
自然に其表現は節奏ある文字とならざるを得ない、勿論
微細な言語の音楽である以上は之を見て一定律に入れ得る
と否とは場合によって違ふかも知れぬが或時は自然律の拘執し
ないものもあらうし或時は技巧を加へし整然たらしめる
事もあらう。要之あらうが其れは律はぬ所に節奏ある
る以後の感想の表現が詩である。言ふは詩の情色は其の
濃厚にある所として如此ければ実に ローマンチシズムが標榜
とした重要の一点である事は実に些しても見て十九世紀
中葉以後の詩は デカダンでも ブラウニングでも 四五十年

(15)

バーンでもロゼッチでも皆ローマンチシストの脈に属して居る
唯其のローマンチシズムといふものが前にもいつた如く感覚の変
形を受けて居るのである。而して小説壇の方はスコット上手
のローマンチシズムが却つて禁ぜずしてヂッケンスへ、サッカレー
よりエリオットに及ぶまで明らかに写実派より自然派
の脈に赴いた。
さて斯の如き詩壇の概観はどうであらうかといふに前には
志はし言つたごとく十八世紀に対する反動といふ意味から
離れて十九世紀がみづからを意識して来ることいふことに其の
て来た。即ち此は も知識主義 に対する感情
主義の反動といふ意味であつてもがはみ至つてから

(16)

感情一方でもいけないよう結びつけ之一層思慮分別が加はつて来ることは事實である。

（以下卅八行目備戦稿下段二十六之一二十八之を挿む）

(17)

蘇格蘭詩人（子爵作

※ "Poems chiefly in the Scottish Dialect."

前期の末

Robert Burns (1759–1796)

First ※ "Poems" (1786) (Kilmarnock Edition)

~~Second~~ ~~"Poems"~~

Jolly Beggars (Cantata 即ち漫遊乞食の群にて快樂の記)

Tam o' Shanter (バーンズ傑作として田舎の作といふべし)

The Twa Dogs

The Twa ~~Herds~~ Herds (宗教争論を嘲るもの)

To Mary in Heaven (妻人を哀しむもの)

To a Mouse (畑にて巣を鋤き返す鼠を見て其有樣を人にたとへたる)

To a Mountain Daisy

ジョージ朝（詩歌に於て此を述べたり裏にも書いてある）

William Wordsworth (1770—1850)

"Lyrical Ballads" (1798) コールリッヂとの合著 新派を確立す。之れでワーヅワースは平凡の

"The Evening Walk" (1793) [illegible]
"Descriptive Sketches" (〃)

自然中に非凡の自然を見ることを主とした ここに於ては
[illegible]のみを表したれ[illegible] 此老中でのワーヅワース
の詩は
Ode to Duty; The Solitary Reaper
[illegible] 此の老年二期にはワーヅワース序を書いて
[illegible]の詩を[illegible]新派の主張[illegible]
"Excursion"; "Prelude" は大作である、
"Ode to Intimations of Immortality"; "Tintern [illegible]"
[illegible]

(18)

Gray, "We are Seven" などである。

Samuel Tailor Coleridge (1772—1834)

"Ancient Mariner" 氏の傑作、Lyrical Ballads 2
[illegible]: 神秘を説く
"Christabel" 同じく物語にてある
"Kubla Khan" "Love" 前は[illegible] 後は[illegible]
Biographia Literalia (文人伝にて也ワーヅワースの詩風[illegible])

Robert Southey (1774—1843)

"Thalaba" "The Curse of Kehama"
"Roderick" 同じく
スコットの詩は[illegible]の時代を[illegible]

Sir Walter Scott (1771—1832) 前半は詩人
の[illegible] ゲーテの Götz von Berlichingen より

(19)

革命的劇詩を作った
"The Lay of the Last Minstrel" が初作
"Marmion" "The Lady of the Lake" が最後で
最も愛せらる。（過去のロマンスを歌ふ）年 Byron の Childe Harold 出づるや我が詩
代表をなし 詩壇を去り 小説に向ったと伝へらる。
以上は浪漫派時代の詩人及びスコットランド詩人（を見て）ローマンチズ
ムの初期の代表的作家の二三人 現代はバイロンのチャイルドハロル
ドの出た年から此期の終りまでに現はれ来る併し時
代はワーズワースもハンキー前後して居るがバイロンと比し
出づ 一緒にワーズワースのエキスカーションもローハルドチのクリスマ
ベルも出づるの出来る 出る詩人群について以下の如く

George Gordon Byron (1788–1824)

"Hours of Idleness" エヂンバラの評論が甚く之を罵りし報復の為であつた。

"English Bards and Scotch Reviewers" 大に当時の文壇を罵つたものなり

"Childe Harold's Pilgrimage" は伊太利旅行の紀行の詩なり "I awake one morning and found myself famous" とは此書の時分である。

"Cain" "Manfred" は戯曲、

"Don Juan" 未完成ながら快楽を述べて書きたるもの

(心つたを回想※)

(21)

Percy Bysshe Shelley (1792—1822)

※ Adonais 其の傑作なる哀悼詩である ~~なる~~
詩に I have dipped my pen in consuming
fire for his destroyer とあるので ~~[illegible]~~ 其の
バイロンが Don Juan の中で John Keats who was
killed by one critique として Keats の為に弔ひ
合戦をしたのである。キーツの為の哀悼詩である 然しよいのは
The Skylark, Ode to the West Wind
A Lament ― など人々に喝采したのが多い 又ドラマ
※ 物では Prometheus Unbound 別に戯曲として成功したの
ではないがローマンチックの詩として見るのである

Adonis — Venusと Proserpineニ愛セラレシが若クシテ死セルもの

Prometheus 一切の技術の祖 天の火を盗みて罰せられしが
ハーキュレス肉を喰ふ鷲を射て之れを解脱す、

(Endymion sleeps with moon)

John Keats (1795–1821)

Endymion 初作で依然たる Keatsish Hampstead ニ於テ
此作詩ニ対シ Blackwood と Quarterly で
非難せられて病気づきしもまぎらはさば是非文憲ある詩外に
もいそで Hyperion (未完の) があり 続いて出たのは The Eve of
St. Agnes; La Belle Dame
Sans Merci; The Ode to a Nightin-
gale; The Ode on a Grecian Urn.
希臘的、併し熱烈もあり、感情の美麗、詞調の音楽
以上三人は運命に似て皆悲惨なる生涯也 外に
Thomas Campbell (1777–1844) 軍歌に名あり

Thomas Moore (1779–1852) 小唄ニ名あり

之ニハ[illegible]

Hyperion is the father of Sun

(24)

Victorian Era

此期は分けて二部とすることが出来る。其れは時代分ってではなく寧ろ詩風の上からである。第一は Tennyson と Browning の詩風、第二は戦慄派と退廃派との詩である。前者は行き方こそ違はあっても兎に角両者共に十九世紀の感情、現代の矛盾を調和し得て其の中に立って居る詩人。従って其の詩風は経営適らざるの総和者であるから一景をなすんで、後者は一は大の十九世紀の大問題を情に主を置いて決せんとしたもの、一は智に主を置いて決せんとしたもの、従って何れとも偏して調和優勝の組織を失う者であると称せられる。

(85)

Alfred Tennyson (1809–1892)

"Poems Chiefly Lyrical" (1830) 此の詩集は世に

雑々感想一束に修養の傍ら（此中には "Lilian"

"Claribel: A Melody"; "Ode to Memory";

"The Sea Fairies"; 等が主なもの、皆小作、

第二集は三年を経て

"Poems" として出で其中には

"Lotos Eaters" "Palace of Art"

"Dream of Fair Women." "前集のものをやゝ渾成して

ある、パレース、オブ、アート等は其好例、美しく言ふ事の方よ

の好例はロータスイーターズで死の城に入ってゐる　此集

其不評で遂に彼は十年を退いて技を錬って、

"English Idylls and Other Poems" が其第三傑で
此に至つて時代の要求した深い思想が始めて完全に出て来て
と称せられる。其中には
"Morte d'Arthur" "The Two Voices" に現はる主
なるものである。併し彼の集つた作は其後に於て七年
"The Princess: A ~~Medley~~ Medley"
之はブランクヴァースで婦人問題を取扱つたもの
"In Memoriam" は友人ハラムの死を悼むに寄
せて十九世紀の問題たる理知信仰と感情の衝突問題の最後に
提出し解決せんとしたもの。結句は妻と神とに帰して此の説一の
平和境に至らんとするにある。

(27)

次に

Maud

二十七扇で失恋の法儀を書いたもので抒情的である　ターヨつて

はイン、メモリアムは重すぎる。テニゾンの特色は却て此方にあると云ふ

終りに出せるのは

"Idylls of the King Arthur"

"Enoch Arden"

孰れも大洋を描いたのである。テニゾンの特色（旧稿による）

Robert Browning (1812—1889)

"Paracelsus" (1835) 初作、戯曲体であるが[illegible]

Strafford [illegible]其他

此の戯曲を作つたが舞台に成功しなかつた

Christmas Eve and Easter Day (1850) [illegible]

(28)　(時子 集8)

"Men and Women" (1855)

第の集の挿之 此が世の現れである。

"Dramatis Personae"

"The Ring and the Book"

~~第の集 其の大名を打立てた二十万行の大作である~~

"Asolando" は彼の死去の年に出来た集である。

自然の大景を詠じ、或は神の非常に言ふべからざる抒情的な詩、難解の詩、あるいは究明的、

Mrs. Browning (1806–1861) Elizabeth Barrett と本名で夫婦好配の詩人(とりわけ女流詩人中の大作佐である。

Sonnets from the Portuguese の中なるに佳作を言い、此の哀、懇篤の詩の結晶である。

Browningの傑作は之に之の短篇集Men & Women
及びDramatis ~~Personae~~ Personae及び其なり
其に抒情的なものが多くあるが. Epistle又は
Cleon又はAndrea del Sarto又は
Fra Lippo Lippi又はThe Last Ride
Together又はLove ~~on~~ among the
Ruins又は又Dramatis Personaeの中では
James Lee又はRabbi Ben Ezra又は
Prospice又はなどがそれとせられる.

抒情詩風[illegible]とは前にもいってある如く知識俳優の性質に基礎を置き
抒情詩歌及び其等同じ風で此の如くに之を採擇したのは字句
上にのRomantic式と呼ぶものがあって、之に対して文藝上
の同様にも見るべきはProse Poetry式でもある
して其の派の詩人が此の分に抒情詩派と呼んだのでもある。又Neo-Romantic式と云ふのも同じ派とする、之を結
抒して抒情的なものとなる其人々はロゼチ、モーリス、
スインバーン等で(オルフーチニー)何れも其人の写したる風格の相違は
種々あるが、其の学術の研究を終了した人の

(30)

でせう。（ラファエル前派の事は畧稿36p.37p.より引く）

Dante Gabriel Rossetti (1828–1882)

Poems (1870)が集の初めで詩人の名を為した、批評は例の通り酷であつて、十年前にしたつて Ballads and Sonnets と云ふ集を出した、詩は色彩豊富、センジュアス、伊太利的、云ふならばスピリチュアルな技巧の勝つたもので Blessed Damozel, Rose Mary, The White Ship, Troy Town などが有名の作です（Christina Georgiana Rossetti は其の妹で女詩人）

William Morris (1834–1896)

The Defence of Guenevere and Other Poems といふ集が(1856)に出て最傑作は(1870)年の

(31)

The Earthly Paradiseで詳十二ヶ月の景情様を
其つカンぶりして一番先に似せ作つてあるのもしはいる絵は
静手で出るクラシックの説出の事 技巧に勝つてある。アマチ中に
妙古風精神の見ゆる絵色です。

次に[illegible]として見らるゝのは
O'Shaughnessy (1844-1881) です、詩の特色はラファエル前派
(Arthur) 田舎の dreamy な所を一層極端にやつてると称せられた程、
又且つ繊細なるは Poe の面影を帯びて居ると称せられた、又言手[illegible]
[illegible]に生きする[illegible]
さとき詩人と称せらる、作中の傑作は
"A Neglected Heart" "The Fountain of Tears"、
又謂うる所の Ode が見るべきもの、此の人は前の[illegible]
詩るが如く好奇なるに、始て佳品をも多く贈りたれども、日
本では集ではまだ多くの愛の郷であつたとラファエル前派とも
同じ派のチャームを持つて居る人である。

(31)

(佐倒 Ode の中の一節は旧稿85丁から引く)
Algernon Charles Swinburne (1837–) 彼は
プリラファエリーツと云ふ其一人とも見られるが又一方には其
外ならず[illegible]自己一個の特色を有って紀年1866年の新た
Poems and Ballads ベアンドBに於ける謡を出すことによれ
D. テニスン、ブラウニングの二人死して後の英詩壇は十人に
(時代からいへば) よって牛耳を取られて居る。(十人の事は旧稿
77丁より83丁まで互って録稿して記す)

後に当時代では丁度之に等しく有名なアーノルドで丁度我情弱な
に於ける臥牛と対立すべき者である。
Matthew Arnold (1822–1888) は本来批評
家として近代の最大者であるが（22年旧稿より一節を引く）
Arthur Hugh Clough (1819–1861)
（此の時代に旧稿を用ふる所以）

（第六 英小説壇概之）

（旧稿のまゝ）

ワーヅワース研究
ロゼチ研究

ワーヅワース研究

([illegible])

ワーヅワースの伝、

生れは千七百七十年四月七日即ち Goldsmith の Deserted Village の出来た年

死んだのは八十歳で死んだ、千八百五十年四月廿三日である。生まれた所は

Cumberland の Cockermouth といふ[illegible]で此地方は

即ち後に住居をトした湖水地方 Lake district の近傍で其の北、蘇

格蘭土に近い山水秀麗の地である。又死んだのは湖水地方の Rydal

Mount といふ小丘の上で彼の自筆の家である。此[illegible]家屋今も残って

他人の住家となってゐる。父は attorney 即弁護士であって母[illegible]

1 は八才の時に既に失って居る。兄弟は凡て五人で W は其の第二子

ワーヅワースはローマンチシズムの先駆者として、自然詩人、自然の崇拝者、自然の解釈者、自然の色彩の一面を表す人として、詩形を平易に用語を主として哲学的詩人として、紫ぬ者なきしかも吾人は今研究の興味を引かるゝ人である。此等は総て過去の事件に止まり其の干係ある詩界で他人のことは思へぬ問題ばかりである。

又妹は詩の好な人として、私共ワーヅワースの伴侶として之を助けて居たを捨てた貞婦人である。

幼時は猛烈な感情家で、怒りを他せずば鉄力で自分の衣服を割くことまでし兼ねなかった小供。母は強烈を気づかって大層偉人になるか大悪人になるといって居た。十四才で Lancashire Hawkshead といふ所の Grammar school に入って居る此中学校は今も残って三百年からの古い中学校で湖水地方の一部の面影を残して、ワーヅワースの名を刻んだテーブルなども残って居る。此で彼は始めて詩を作ったといふことが伝へられて居る。併し其の時の作は幼稚小供のまね事で大したものではなかったが、既に for a time imitation of Pope's versification につくのであって and a little in the style

詩人 [illegible]

(3)

の形色が印せられてあるといふ事は。~~初年の作品の中の詩作で其の後多年~~、今の詩集の初め（変遷の）に

Extract from the Conclusion of a Poem, composed upon leaving school. 最も詩作が

其の氏の作の一端であろう。自然を歌って平坦の調を知って居るのは

わかるかと見える。又此時代が紀に於ては文人としての素養と

詩を書くし始めたらしく スヰフト氏や、フヰールディング氏や、セルヴンテス

の書を（思のまゝに）乱読したとの事、十四歳の時に父が死んで~~其の後は~~十八の時

母も死んで、貧乏の内でケンブリッヂに四年学んだ、併し此時は

経済的に於ては余り自由でなかったらしい。此時期の作としては詩集の

去り行かぬ世に出てゐる Evening Walk とでもいふものが付いて

ゐる位の最初の遺作として、氏の詩は無名の徒弱である。其の詩は

全篇たゞ一ときゆみして故郷の山水地方就中湖水地方の自然を愛し慕ひ謳歌するの情を発せたもので周囲叙景に傾きてゐる、其の静かな情緒と自然を見る眼の着しさは目立つて見えてゐるが併し此作はあまりにくどくどして且つ単様に過ぎて居る、大作とはいへぬ、所謂篇中の七年人公が饒くあて居ちあたいつ告白叙事叙景に墨汁を費し過ぎてゐる、

5

廿一の時（1790年）彼は伊仏等の大陸旅行をした。仏の革命熱に写

されたのは此時であるらしい。Descriptive

Sketches と題する詩は即ち此旅行記の一で

此の旅行の記としてはずっと後のものである

尚ほ此処で Prelude に

—Europe at that time was thrilled
with joy,
France standing on the top of
golden hours
And human nature seeming
born again

ちと詠つるにて其似をなお見せられ[illegible] Description

Sketch は未だ彼の[illegible]年の作の[illegible]も多く新時に迄せず

すなわち十八世紀の[illegible]の跡を残す[illegible]けれども其中にも

よしなお句はある[illegible]

And oh! fair France! though now
along the shade
Gleaming wars discordant
resounding through the trees;
yet, rest thou found

That freedom spreads her power
Beyond the cottage hearth, the
cottage door.

此詩ハ前と同じく当時の仏革命ニ揺一て花蹊ノ大
少年の状を想見すへ何ニ無く只一句の例とては

Heavy, and dull, and cloudy is the
night;
No star supplies the comfort of
its light,
Glimmer the dim-lit Alps,
dilated round,
And one sole light shifts in

the vale profound;
While opposite, the waning moon
hangs still
And red, above the melancholy
hill.
By the deep gloom appalled,
the — — —

8

◎翌1891年二十三才で卒業し其秋再び仙台に行つて
華年の判然の味読かふれてであらう（[illegible]の[illegible]の工）
翌年まで住み止まつて研究し reign
此書状を又見ることが情ある事多く帰つて寄せし Terror の[illegible]
もく止まつてみたら 後も生命は[illegible] 年かつてちしとりぬ

てる事、而して帰来何に[illegible]年も経ると共に経れるに
気の弱きところは保守的に甚しくされば仏西革命の短
思想が自由の名の下に行はれたる[illegible]をつくづく感じ
ることを経験かもしれない。去一方には斬新に改良の
一事をしたるとすが一は吉初代の詩の永く世あるに批評せ
られた一現象にして当時は改竜教の改良りし明治初期
のエゴイズムにつらレビ[illegible]なんとが[illegible]に改良教[illegible]文子を出揃
到底[illegible]時代も
[illegible]事を始めての Evening walk と Descriptive Sketches を書くに
のしれがせの多作は早かつて只[illegible]コールリッヂは三色

(110)

流してやなかもしれないといふ。其後二三年は彼は
妹と其の娘と二人で旅行などして居て其後に彼は詩
人を天職とすることとし[illegible]男は[illegible]つくしく
とよってびとが偉大な周囲は別してもらく お彼は
ねえ姉め The Philosopher [illegible] とよ[illegible]を[illegible]と
したが成功しなかった。ここで自由主義の思想
すればそれをだめくぶつうまく行かず[illegible]中
に幸にも現在の[illegible]（病床に看護してやった）Culture とよおおよが
彼の才を認めて死後[illegible]の九日[illegible]ばかりの
遺産を与へた。之を本に他の[illegible]の金もあって

(11)

廿幾年経れば先帝向背の国民殆ど遺忘れ、甲斐の作詞に
談笑り四方さとくなつて、新しく又歌の文の庭作れて其の中之旋が
飛んで天の高くかすかし掃きも古拙けれ然る陰翳の甚機
少の国々なつて。
1725-6年隆は妹と二人 Dorsetshire の辺を徒て流去翁作
詩田園を旅つて、又母におもてられのか Bordeaux と思ふす
悲劇で之は ヘンリー二世頃の蘇格蘭王の後嗣に
花ちて其十幕自ぜつ合様に作つた悲劇である 倫敦の Covent Garden
座を通つたが、舞台に仕上しあとしろん返された、後年出版
されたが之れ限り保以下劇曲創作せしし、
又氏日始めてこいしりかと相苦り欧洲に並んで紀

(12)

之を続け遂に1797年の夏コールリッヂの住んで居る
Somersetshire の Alfoxden に移轉した 茲で始めて彼の
Lyrical Ballads 出版の思が出来て来たのである。
之は二人が語りつりでたコールリッヂは始自終二の見聞を
以て時代の詩風に違って居るものをかいてみるといひ、ワーヅワース
は平凡の材と言語とで之をやって見るといったので両人
合意となって〳〵コールリッヂは彼の有名な Ancient Mariner
と他に一二の小詩が出てワーヅワースは彼の [illegible]
Idiot Boy や其他多くの詩が出来 1798の
秋に出版された [illegible] 五十磅 [illegible]

(13)

報酬をもらつて、世の中からは平語倫語に返すと攻撃せられ、未(?)陸
すかさず直路梳は将ちして世の中に再び返されたる

(14)

リリカルバラッヅを出して置いて直に（同じ）翌九八年廿九の時に彼は妹及びコールリッヂと独乙旅行に出かけた。~~ゴスラア~~、Goslar 地方に留って一年許り居て直ぐに Lake Grasmere とか Rydal とか

Nutting など、Prelude の執筆も始めかけ依って、（始めて其頃を作りし湖水地方に居を卜した。1800年は）何年かの詩を作って Lyrical Ballads の第二巻と共に出し巻を再版した。此に名高な序文をつけた。けれは不福料を

る議論を起して世評はよろしくなかった評が、めでに非常の趣味を解説した妹でもって。1802年2月に結婚した、

[illegible] という婦人であった。1803年2月にコールリッヂ

(15)

此年 Recluse 成る 全篇の一部分

寄と蘇格蘭土を訪ひ、1805年にはスコットがワーヅワースを訪ふ
1807年に更に[illegible]詩の詩集二巻を出して世評は依然
反抗的であつて。却て悪評も甚だ盛なりし。而も作者は更に
の世評を動かさんとて、1817年には隠遁の地より [illegible] Essay を稿して
此頃彼は ~~[illegible]~~ distributor of stamps の役を推されて
経済上の助を得て、五つ諸の夜人多からずとは古人 Lonsdale 卿の世話
で夫のエキスカーションのデデケーションは之を卿に与へて、1814年
は此の篇の[illegible]の年であつて、世評は同じく猛烈な反抗であ
つて、1819年 Peter Bell を出して始めて好評を博して再版、
此頃より好運、1831年スコットの衰運を訪ひて、此時より
晩年 1839年牛津学位 1843 桂冠詩人 1844 [illegible] 1850 死

ワーヅワースの作では種々の集があるが最完全なるのは
Wordsworth Society の会も Knight の校訂した
十六冊もので之には散文も何も妹の日記も残らず
入って居る。（1882）撰集では M. Arnold の
Selections from Wordsworth が最も良いものである
評論は数限りもなく有る 古い物では Coleridge の Biographia
Literaria が有名、それより De Quincey の
論文中にあるもの、又近頃では Knight, Brooke
等の人の文名大学史伝の評論等がある。

ワーヅワースは其第二版 Lirical Ballads の序に於て詩を論じて曰く
詩は common life を common language で説[illegible]ながら平凡ならず併し詩
は unusual way で出たる[illegible]からず要するに imagination の
力も必要なりと言ひて又 Primarily laws of our nature を顕し
而して Philosophical ならざるべからずと云ふて併し
結局曰く triviality and meanness より脱して普通とは異なる我
が詩は気ではない、少くとも我詩は凡て一の worthy purpose を
有して居るので其の feel [illegible]から[illegible]のである、但
purpose といふても何も始から明かに一の目的を[illegible]して[illegible]を

(18)

詩を書くといふのではない

……but my habits of meditation have so formed my feelings, as that my descriptions of such objects as strongly excite those feelings, will be found to carry along with them a purpose

即ち我が習慣に従する所におのづから其の詩境物が一ヶ月

綱を見ずや、それ家は何やかに 忙しく酔がついてるのである。言ひ

かへれば深き目的をもつてのではなく日々物窓する毎に

おのづから深き目的がそれに伴つて自然に其の結果を生ずるのである

12ヶ月的あまやかに思はれるのである。

善し

(19)

all good poetry is the spontaneous
overflow of powerful feelings: and
though this be true, poems to ~~w~~
which any value can be attached
were never produced on any
variety of subjects but by a man,
who, being possessed of more than
usual organic sensibility, had
also thought long and deeply.

詩は強烈な感情の自然の流露である [illegible] 題材に
[illegible]
以上の感受性を [illegible] 同時に [illegible] 人に

(20)

して始めて美しい詩が出来る、更に精しくいへば我等の感情

の純粋は常に吾人の思想の感情の代表たる思想又は

によつて左右せられる、即ち氏(?)思想[illegible]せられの経験

即ち思想の諸感情の夢形なる諸思想の比較研究

によつて何んらか人世に重要のものであつて、かゝることを

発見する、斯くの如き作用を発せし時に何時となく詩人

の感情は[illegible]を青目的に機械的に重要なる

材料を感じ得るやうになる其の事物を[illegible]と

叙述しなりこの感情を述べなりすれば一ッの思想に

進化させて実現しなる光輝を発するやうになる、

(21)

是がワーヅワースの詩の精神を代表する論據で又趣味の論と思ふ
詩は詩人によることで詩人は鋭い感受性と深い
思考性とを兼ねねばならぬとするのは過去の言である。詩人は常に
常人以外に声をきき色を見てかなくてはならぬ、造化又は吾人
のもつて居る以外にどんな色や香やが無限にあるかも知れぬそれを
感受するのが詩人でなくてはならぬ。而して又之れを深く思ふと
はなお意識的方面もたしかに近代の文学から抜き出さうと云ふには
行かぬ。
然るにワーヅワースは斯く鋭く感じ深く考へ行くと習慣
的に独りでに造化の深さが解けるやうにすると云ふ説の

許諾目的ある詩である。近代に Purpose novel といふものがあるが
ワーヅワースのは Purpose Poetry で其の Purpose のものが上の
如き哲学的のものである、故は面白い。而して之は曽に詩の
みならずＡその文藝に適用せらるべきもので、曲詩為ワーヅ
ワースの文藝観が之に居るてあるのである。
さて近代文藝哲学は言ひかへれば謙またある人の
感情は、感情を自然のまゝに出してすれば宗れで進化と
丸適あるといふので、主観的抒情的の自然主義なほち
自然を写す(写実)とは感覚我れ他を写実に写すの論で
我れと自然とは唯一無二となれ帰するのであるが

彼は之を更に一層平たく言つて単に

— it is to follow the fluxes and refluxes of the mind when agitated by the great and simple affections of our nature.

即ち吾人の大なる単一なる情緒の動いて居る時の心の跳躍を写すといつて居る。之れ全くの抒情の定義なる。要するに純なる大情緒を写せざるべからざるに何処に彼の詩間同時は去て事なるに其主張同時要の情緒なるよ、故の

性格等といふのでは無い其の奥に何かあるかとなるの
を忘れてはならぬ。而して彼は此集の内的の何等
か或は説いて居らぬのである。此点は一の神秘観
とも見られる。彼のNatureは何んなる意味かは説明は出来
ぬ。S. P. Keeのワーヅワース論に曰く
ワーヅワースはNatureの[illegible]を以て[illegible]を信じて居
して彼はrealizeそのものを足場として出て来た、而し
其の所Natureと云ふ如く言ふ味は容易に説明出来ぬ、
彼の主義の中心はpoeticalであって[illegible]ではない
彼の考えではImaginative Will る

a power of interpreting the world
— not altering reality, nor re-
moulding the scheme of things, but
reading it truly

かく言へば即ち主観的意義となるべきものが進化を有のままに
解釈する力であるとした所は実在を変形するものでもなく実
は進化を流すものでもなく又かつての自然派の立場主張した
ものとは全く違った論点である。

全く同じくKer氏曰くワーヅワースのやり口はRealismと呼ばれるものに似て居る。併しRealismは普通に所謂cool temper, making, intelligent notes, without affectionであるがワーヅワースのはこれと違ふ。彼は

does not take things as they come; he takes them each for its separate value — that is, for its value as part of his own life.

即ち自分の物を夫々其のまゝにして受取らず自己生存の一部として各個の價値を附して受取るのである。

左れでワーヅワースは論をつけて自分の作中 "Idiot Boy"や"Mad Mother"では maternal

(27)

passionの種々なる曲折を現はし Forsaken Indian
では Last struggle of human being で気分を
見はし We are Seven では幼時死の着念の不可能と
いふ考えで気分を見はし The Brothers では
fraternal attachment — と同胞の愛
化との干係によつて気分を見はし Simon Lee では普通の
mortal sensations の中から非凡の意義を流し出す事に
よつて気分を見はし — "Two April Mornings"
"The Fountain" "The Old Man
Travelling" "The Two Thieves" 等では
単純な平凡な人物を描いて気で気分を見はして居る 又

終りに言ふべきは自分の作は feeling が発展しておのづから action や situation に重きを加へるのであつて世間の読の多数にてや境遇の力で feeling が重きあるのではない（即ち感情の自然の調子で、さしもなるのではなりとする）"Poor Susan" "Childless Father" の字句はこれをよく示す。のみならず残中一後者の最後の一節の如きがそれであると。Childless Father は事に絶句を引いて見ると

"Up, Timothy, up with your staff and away!
Not a soul in the village this morning will stay;"

The hare has just started from Hamiltons grounds,
And Skidaw is glad with the cry of the hounds."

Of coats and of jackets gray, scarlet,
and green,
On the ~~steps~~ slopes of the pastures
all colours were seen;
With their comely blue aprons, and
caps white as snow,
The girls on the hills made a holiday
show.

(29)

Fresh sprigs of green box-wood,

not six ~~xx~~ months before,
Filled the funeral basin at
Timothy's door;
A coffin through Timothy's threashold
had past;
One child did it bear, and that
child was his last.

Now fast up the dell came the
noise and the fray,
The horse and the horn, and
the hark, hark away!

Old Timothy took up ~~his~~ his staff, and he shut
With a leisurely motion the door of his hut.

Perhaps to himself at that moment he said,
"The key I must take, for my ~~Ellen~~ Ellen is dead."
But of this in my ears not a word did he speak,
And he went to the chase with a tear ~~to~~ on his cheek.

31

(32)

（御元）ワーヅワースの説く自然とはどんなもの、何であるかは何から
とって来ても彼が詩の上で見付けたものは要するに何であるか
之れにはおのづから（前に云うた如く）二つの見方がある。一は彼の
"Ethics of Wordsworth" の著者たる Leslie
Stephen 等のやうに一の固定的系統立てて道徳の idea を
築てゐるとする即ち彼を Philosopher と見る方で他は
Arnold 等の如く（前の者なども同系
統）之を除けて life 自然の feeling を直接に
描くれとするものであるが是れ等らくワーヅワース
の他詩人に超越する立場を見出すは life

(33)

with life, as a whole, more powerfully にあるので[illegible]である。スチーヴンは第一流の人が其の純潔[illegible] 彼等の philosophy に重きを置き過ぎ[illegible]は過ぎである。his poetry is reality である、写実 Poetry is reality, Philosophy is 唯 illusion であるから彼を詩人として保留せんとする限り彼の重きは其の reality に[illegible]此点にあること、之はあらゆる文芸観に伴ふ二つの反対した方を代表したもので、文芸が生きた観察即ち情のものでなくてはならぬと言ふ事

(34)

でもなくりが同時に其内容たる思索を助けもして哲学化
~~□~~して、一面造化自然の中に哲学あらしめ文
藝の中にも哲学ありとしたのである。不都合は之から
がれば此の種の批評家は出るもすると、余りに其の生きて
居る実際の情から離れて抽象的の途を遂げ、作を遂には
批難が出来るのであらう。又此の思索的要素（作家には
~~□□□~~をも何なる地位を占め居るか、文芸を
実践する時に如何なる地位を占むべきかと云ふ事は
近世の文藝評論の根本となるべき一大問題でな
くてはならぬ。

(35)

ワーヅワースは之を彼の所謂 Presence は之れ住み止めて置いて其實際の意味は何うであるかと更に彼れの如きものゝ情に通じて見えて居る情は、一種の寂しみがある、極静かな平和な僻しながら淋しいものである、日は暮して光明安慰慈悲はあるけれども何うか淋しいやうな感情である、此の情味は漠然之を名づければ哲学的と云ふよりも寧ろ宗教的であらう。而して氏の中心感情の説明は彼れの二傑作たる「Tintern Abbey」と「Immortality」との中から最も明かに見出されると思ふ、

要するに私は過去の快楽を追求するよりは又た無限の（死や自然に対する）
無常を感じ孤独を感じ之れによって心が淋しくなって
[illegible]が盛になり[illegible]に対する興味が出て来て之で
~~自然~~あらゆるものを同感の目で眺めやうとした其の
最後のものは此世の変化の底に不変のものを求めると
いふに帰する。即ち少時の猛烈な自然に対する観念、壮時の
其の衰退、悲哀、同感、人間の哀に対する感め、不存、と云
ふやうな順序であった。而して其の一部は私の性質上の変化
即ち熱烈な自然主義と其の後の~~静~~静化との理由
は申すまでもなく生理上心理上のことであらうと思ふ。誰も[illegible]

(37)

宿までは真斯んなりては有るものゝ如ど総ては真自な発となるる
のであらう。(チンタン、アベーと不朽の歌とはセルヴベリー既に大
傑作といつくもの 一は其の Sounding cataract haunts me 云々の句の他は
Birth is but a sleep 云々の句あるうたである。けれ其例を引いて
論を詳論して(へんアベー チンターンの (116 P. の詩。For nature から
subdue まで(第三、不朽の歌 315 P. Our birth is but a sleep から
commonday までなり (第二、不朽の歌 314 What though the
radiance から Philosophic mind まで (第) 要するにあるものの
を自然の光ひて概ム而し堕して見るやうの如くの価値の摘みまで
あらう エキスカーションの序言に引いてある句に
On man, on nature, and on human life

(38)

Musing in solitude, I oft perceive
Fair trains of imagery before me rise,
Accompanied by feelings of delight
Pure, or with no unpleasing sadness mixed;
And I am conscious of affecting thoughts
And dear and dear remembrances
Whose presence soothes
Or elevates the mind, intent to weigh
The good and evil of our mortal state.

こゝが彼のエキスカーションを志して[illegible]殊に又は極ても見らるゝもの
である。而して[illegible]やがて来る的に言って 宗教的たる[illegible]
の記録で彼の記録[illegible] Philosophic mind 廿廿れれ外女
らしめ。

(39)

ワーヅワースの詩論は之れに止めて次に彼れの詩形論に移る

らん。前にもいつた如く彼れは詩形の措辞なる方面を中

心として議論をしてあるのであります。即ちおもつとも国民は本

当 language of men で詩を作るべくけれども何にも

personification of abstract ideas などは稀にしか

使はぬ the company of flesh and blood であ

らしいと思ふ。又従来の詩には falsehood of description

を避けて居る。或は其の時代の詩法を prosaism と評して蔑む人

もあるが併し乍ら好い詩で真に人を感ぜしめるには

却て此れである。例へば Gray の下の詩の例（引いて）つもりである

である ~~poets~~ poetry ~~sheds~~ sheds

no tears such as angels weep, but

natural and human tears である。

詩はアリストートルがいつた如く most philosophic of all

writing であつて其目的は truth で individual,

local ~~で~~ [なものではなく] general 且 operative なものである poetry

is the ~~was~~ image of man and nature である

Poetry is the breath and finer spirit of

all knowledge である

B/(40)

(41)

ワーヅワースが詩形論の概要は前回に述べたが、之に就ける前人の批評中では例のコールリッヂが Biographia Literaria に於いてなしたるもの及びセーンツベリーが其の批評史に於いてなしたるものが最も重要である。前者は元来此の書中の最要部で此のワーヅワース論で友人の詩を同情を以て而も是は是とし非は非として一代に重きをなす作者としても地位ある詩人が評したものとして英批評史中で傑出したものセーンツベリーがこれを the Bible of Criticism と言つてゐるのも故ある事である。さてコールリッヂはワーヅワースの論の力点即ち普通の言語の語で詩を作るといふに対して

(甲) そんな普通下賤な語は却つてワーヅワースの目的を助けず
して之れを妨げはせぬか普通人の普通語は自然と直接
特殊の交感の結果を示すものさとはなりがであ
る (Saintsbury III P. 40)
故に[illegible]文学大切とするけれども之れを用ひて散文に適して
詩には適せざる語は絶えてないか又詩に適して散文に適せ
ざる語は絶えてないかは問題であるが何れにせよ此の
別あると思ふ（公理）と又第二点即ち詩格律を
千して[illegible]は別に此かんワーヅワースが純格は只快感
を附加し増加せんが為に云ふを要すと云ふ説にても
かゝる詩の理由は述べぬが此の用語の欠点は
進んで論ずるも此に於ては云ふを以て詩と散文との区別

として用ゐると云ふのである。但し同時に総ては詩と詩ならざる文との区別としては that species of composition which is opposed to works of science by proposing for its immediate object pleasure, not truth. 即ち目的を快楽に置くと云ふ所で区別がつくとしてある。セーンツベリーは之を攻撃して見て此コールリッヂに純粋に確定なる見つまかつて居ると云ふ事をゆるすとする。但し思ふに是は矛盾ではない。コールリッヂが前にPoemと云ふのと後にPoemと云ふのとは意味が違つて後の方は広く文学をscienceと対して其の中での総ての詩を代表的に言つてある。前のは文学中で

(44)

詩と散文とを対照せしめるのであらう。それは[illegible]
コールリッヂの論は韻律は詩の本質であるといふのであるから
細評が正しく不明瞭なのである。まづセーンツベリーはワーヅ
ワースの韻律論を評して云ふ[illegible]
それば ワーヅワースに於ては韻律詩は本来非常な深い関
係を有する性質を主とするものとするやうな
外形的な方から来る快楽をも詩に必要といふのは
おかしいといふのである。是れは鋭い批評であらう。ワーヅ
ワースの韻律論は甚だ不備である。蓋し此の論は二段に分
けて見なければならぬ。第一段では詩語自然の韻律と云ふのは
詩の内容の本質の表れである。ワーヅワースの詩語律

"All compositions to which this charm of metre is superadded, whatever their contents, may be called poems" Coleridge (from Saintsbury. H. C. III. P. 209.)

(45)

り思想が感情の調高目に達した時は emotion 2
なつく時はおのづから音節韻律を要求する。コールリッヂが詩
な事の事とやうには満然足としては試みても之は否つて居る。
又　更に世界の量を悟えがために附加するといはなかつては
ならワーヅワースが何故に此気まで救ひ至りねばならんかとい
めに至必然性理想を含む　即ち彼れは一方情を [illegible] すると云ふ
[illegible] emotion recollected とか言って書に拘らず他方には
emotion in tranquility が詩だといつてゐる　之は彼の
詩の風格から来る自然の結論である。因云ふまで [illegible]
詩は何となく静的 [illegible] でもよい。因やうに [illegible]
彼等の心あるらう　而して全体 [illegible] を捨てる　さとは

(46)

生来ないからこそ生じて来る附加といふ曲芸しい技巧
であつてこのではないか。さて第二に残つてる問
題は自然の律格其成様待月夜の事のかも知れぬか
補定型詩の律格といふとそれは甚だ些する程度
に於てか人巧が加はり整理せられて来る。是でな
ければ律格とはいはぬ。節奏はあるが律格はないと
いふに歸する。人巧的律格といふものが生じて
来る、問題は是れからなので、即ち何故に人巧
で整へられを整理するのであるか、寧ろ何
の自然の流動のみならず更に技巧の上に於る

(47)

なる為めにやうな形にして形式が附加せられし
を要する理由があるのではなりか、言ひかくれば形式美
といふものが内容美と離れて二元になつて存してゐて
これを内併合せんとする所から内律格を加へる技
巧を加へるのではないか。蓋し此の場合に於いて自然的律
格に技巧を加へるを以ては其節奏を或る程まで整理す
即ち規則的にする規律的にする、併し規律的旋律一般
といへば同時にあまり　第一ではならぬと思ふ要求
から変化を生ずべく加はへるから語る変化の
縦と云ふ形式美の方うしろ撤去してあるので、要す
るに詩は何んか此の形式美をも内容美と併せせう

(48)

要するに法ないが要するにすれば形式美と
内容美との干係如何 二元か一元か 一元ならば
何れが本かと云ふ美学上の問題に到り 直入って
もあるまい。
当面論ずるはスールリアリズムがワーズワースの如きも紀行
を動「平ザ」く範囲を示せ 其の紀行の方
は考へ monotony 及び即ち悪しにし
名句美辞が出てくるし 文も揺なく
平凡な句に感動するさまを示す 自分は
language を凡そ脈え下げて、特に特殊なもの

(49)

二、散文にのみ特殊なもの、三、必ず韻文に適するものとするが此
の第二のものが更に言語のつて来るので、故に第二は
matter of factness とでもいふべきもの（韻文詩を許すなら）
其で非常に事即ち其書いてある物が微細に
までする実在を描写してあるといふ点で他は専ら其の
を現実らしく見せんために偶然の事を挿入（全）
することである 第三は戯曲 dramatic form の或は
ある事件を述べてあるものである 第四は書いてあるよ
と云ふ様にして有る 情の字句とか不可思議のものに
多くの人には分からぬ ものとなるのを
第五は思想を像が其が既にも大に違ふまでである

(50)

mental contrast の点に於ては

日本語は史 purity of language 及 both

of grammatically and logically 完全である故に

は思想感情が乗って表直面目に健全で

且つ其れが素朴などから出来てのびなく緩みがないの

meditative observation から来たので They are

fresh and have the dew upon

it で 無理に中學に Sinewy strength and

originality を有って居る perfect truth

of nature が此間の紀一に経験から得られ

て居るのを 彼の記叙が實際に存して

而して は

a meditative pathos a union of deep and subtle thought with ~~[illegible]~~ sensibility; a sympathy with man as man' [illegible] sympathy ~~to~~ fellow-sufferer [illegible] contemplator [illegible]

~~[illegible]~~

~~[illegible]~~

~~[illegible]~~ [illegible]

[illegible] The superscription and the

image of the Creator still remains legible to him under the dark lines, with which guilt or calamity had cancelled or cross-barred it. [illegible] (Chambers Cyc. Eng. Lit. III. P. 70)

ロゼチ Dante Gabriel Rossetti (1828—1882)

ロゼチ~~[illegible]~~は前にも言つた如く一面畫家として一面詩人
としての兩面を兼ねた人で自然に兩面を相干せしめて
研究する必要の事、近世の英國文學史では最も興味
ある人の一人である。又英國では大陸的に傾つて居るものの如
く注意と~~[illegible]~~（かあるびと云ふ）伊太利から來たもの、余り開花久しく文藝上に地步ある
點で更に近世文藝史上の所謂ラファエル前派と
（一）いふ~~[illegible]~~新しい主義運動を起した人として
（か唯美主義とか）

(二)

乳風の畫で比する人であつて、彼れの畫及び詩集の外
評論のは數々あつて我中畫家としては ラファエル前派
を論ずるものでも此人を論じたのが數多くある。伝としては
紀けれども此の William Rossetti の兄の集の書いた伝、
又は（評論としては）F. M. Hueffer の "Rossetti" 又は Theodore
Watts-Dunton の Encycl. Britannica の執筆
よりなど又（絵としては）同じく前の W. Rossetti が集めた Ruskin
Rossetti; Pre-Raphaelitism と題されたる中の
ロゼ[illegible] 手紙の寄せる書簡文 など又 Walter
Hamilton の "Aesthetic Movement" in

(三)

England "其他 William Sharp や Hall Caine
(Leslie Stephen) 等の区々千萬なる文学諸種の文学史 絵画史中
に之[illegible]出ずるの多し
彼れは如何は Gabriel Charles Dante Rossetti
と云ふ名で呼ぶのを中途で更へて上の如くなるに[illegible]たと称
せられる、ロンドンで生れた夫の[illegible]学校で一通りの文学教育
を受け(Cary's drawing Academy) 後の Royal Academy 附属の一学校で[illegible]絵を学んだ、彼れの父は
伊太利の革命家の一人で Gabriele Rossetti
とりひロンドンに逃れ来て其の King's College の講師
となつて居た文人である、母は英吉利生れではあるが伊太

(四)

伊太利画派の人で謂るよく知られたロゼチの画派は
three [illegible] は伊太利であつて之れが絵の性格
つて其の作全体に渉つて特色の性の一である
又ロゼッチには一弟一妹があつて何れも文学の人である
ロゼチは ロヤルアカデミーで(附属の学校)はれい古画の模写位をやつて
其の以上あまりやらなかつて全体の絵は技巧を学んで
ごく人であつて從つて其の作は天才の作ではあるが技術
家の作ではなかつた 研究した画家に
なかつたので彼自ら其方の幼時からではなくて
即ち凡そ1846年頃即ち十九の頃まで二四年
四までやつて見たが何も画の技術の知識は無かつた

(2)

其なかつたと練せられず、遠近解剖の知識もなく不自由で

書方も知らなかつた。唯此作家の興味を引いたのは

外は絵画の色彩的の方面であつて、而して此作家に

は彼れに影響を与へた画家は Madox Brown

であつて、彼の父ガブリエルなる画家ロセッチの父は大いに

又甚文学的方面に此頃から亡命して1824年十八の時には已に

伊太利の詩を訳し、ダンテ研究もやりして居つた。又彼れに

最も多く影響した英国詩人は如何 Shelley と Keats

殊に Browning であつたと云ふ。1847年頃彼の最も名

な Blessed Damozel の詩を書き始めて、

(六)

此頃のセザンヌの弟子つまりは其ラファエル前派同盟の一人
たる[illegible]又、G、スチーブンスが始めて登場して来る
様子を想ひして、両手をポケットにつっこんで欠伸に鼻唄として傍
に人もなげの様であつてとつ[illegible]てのこ又ボルマンバントが
訳して（Hueffer 氏、例）実やうに何故か[illegible]どっしりし
た Passion や Animal Power も無い空精神的な人物であるく
らしい、彼れの此期の作は事なるく踪跡で、甚中に已に
彩細は出て見と依せられる、彼れは始めブラウンの弟子に
なつたが其弟様のうるさいのに[illegible]傍[illegible]して中途
で止めて彼は若い画家 [illegible] の作を嘆称去
[illegible]服するの余り其の弟子とならんことを乞ふて。但

(七)

ブラウンとの交誼は終生衰へず又ハントとてもつまらな人とその

~~周囲~~ 往当佐に違ひなかつたらしい。兎に角此両人によつて

ロセツチは其画家としての初期を少なからず扶掖せ

られた。又 ~~[illegible]~~ 少年時代からの画家の友人で乃一人は夫の

Millais である。斯くして彼は年来一の理想を

彼れは友人の周囲と共に夫の ~~[illegible]~~

Pre Raphaelites Brotherhood を組織した其の団体は

Millais, Holman Hunt, Thomas Woolner

(Sculptor) Walter Dowell, F. G. Stephens

W. Rossetti であつて ゴー一乙氏迄の仕事記任、

~~[illegible]~~

Stephens が言つて居るのが当を

(八)

ほて居る見ず 彼等は現在の作家の作品に満足し はずして
綿密かの "Principle" が無くして take your
inspiration from Nature に学ぶ事でなくして
一寸其等一般の風であって古作家の模写とでもいふ不満足
ので直ちに自然に就いて本当に見ようとするのである、
~~其時代に於て直ちに図案家と画師とは共に存在して居らなかった~~
~~それ故に其前の絵画は画家もせられし其~~
あるファエル前派の事は以前にも一言した事があるので
結構しく説明する事もしなかろう、

(九)

併乍ら ロゼチの如きは寧ろ彼等の ラファエル前派と云ふよりは寧ろ同派
せられた、此派は此の如く絵画の上でのみでなくて尚
し兎に角文学其他の芸術にも及んで、此の派の特色に就ては
ロゼチ自らが此派の一弟子によつて述べて the qualities of
emotional but extremely minute realism, which parti-
cularly characterises ~~the~~ the style so called
Pre-Raphaelite, are to be found principally
in all the pictures of Holman Hunt 等と云ふて居る。画
り emotional と云ふ realistic と云ふことの二つである。
次に其のラファエル前派と称する派については スヰンバーンが
後年之を説明して言ふて居るのが最も其の
Fine Art, chiefly Contemporary (1867) と

The painters before Raphael had worked in often more than partial ignorance of the positive rules of art, and unaffected by conventional rules. These were not known of in their days; and they neither invented nor discovered them. It is to the latter fact, and not the former, that the ~~[illegible]~~ adoption of the name "Pre-Raphaelites" by the artists in question is to be ascribed. Pre-Raphaelites truly they are — but of the nineteenth century.

(十一)

Their aim is the same — truth; and their process the same — exactitude of study from Nature; but their practice is different, ~~[illegible]~~ for their means are enlarged.

といつて居る。畫法の時ち以前の畫を慕ふと云ふ丈でラファエル前派
といふのである。此れで見ると吾人はラファエル前派には種々の複雑な
要素が這入つて居る、情緒的といふ事、寫實的といふ事、自然的
といふ事を眞といふ事と等である。即ち其情緒的といふ事が
てローマンチックの脈で有其の寫實的といふ事は寫實派の脈であ
り其の自然といふ眞といふ事も自然派の脈である。仮りに此
三要素が其極度に發達したものと為せば此れを最もよく説明して

(十一)

大成したものは多くの畫風でハントまで最後まで最も忠実な
此れも主張者であつて、ラスキンが理論の方面から之れを
（此中写実がヒステドをが著しく見えてゐると称せられし）
補助したのは専ら其の自然物の方面からであつたことは
彼れがタイムスびの此れの弁護文に於て自ら八年前に述べた
畫説此の事に就き告を青年畫家によつて

They ~~should~~ should go to nature in all singleness of heart, and walk with her laboriously and trustingly, having no other thoughts but how best to penetrate her meaning; rejecting nothing, selecting nothing, and scorning nothing.

(十三)

といふものを其の通り写せばよいかんとするものが即ちラファエル
前派と称する一団の青年画家である。画家は
而して又画前派色中の情緒的といふことを主として
代表しているものが即ちロゼチであらうと思ふ、ロゼチの
画になると一種の古拙幼稚古雅などいふ味がある。之は前の画
ラファエル等に従つて大成した後世の画と較べ知識を主とするものを絶と
頭に入れなかつたもの、又自然を写したものである。又純朴
の縁には一種の神秘的な画所がある。之はラファエル前
の画風の精神が伝はつてゐるといつてよい。其後人には
写実的の精神も之を細かに一々描くと云ふ点では経じ
ある併し自然派と連続するもので外国界にあるがぬ如く

(十四)

写実しきれのを写すまとてその上は意味から甚しくある、感情器的
とまでも野鄙せられて其情緒的なものとすれば価値なもの也
細実すまとてその意味での写実になってある。甚しきに至ってロゼチ
はその写実主義に至る自然主義の至るラファエル前派
を自然派の思想の主張なるを解すること無く主として行方が
違って来る、甚しきに前派前にも至って無くラファエル前
派には両方せらるるを立ち場から二つの主義が混
合せられてある。甚しきの緒子を引いて言って居るが如き事がある
実は後に説くべし
さて話が前に帰りて[illegible]はラファエル前派[illegible]時代は1849
年のローヤル、アカデミーの展覧会に画を出して始めて
人目を惹いた。此等の若者には[illegible]とい

(十五)

輪郭を附したのが夫のRoyal Academyの尺寸と
九種之人の不思議[illegible]を挿入したのが翌1850年
2の Illustrated London News でラフアエル前派とよ
さとでもいふ意味の大批評の論を載んで一種の自
然主義を主張するものであることを明かにしたのであ
ち非常の反抗を呼起して盛に攻撃せられた 1 5
沢山の同じ大学の人が集まって其の次の月を主筆として
The Germ と題する月刊の雑誌を出した 其表紙
2には The Germ ・
Thoughts towards nature in Poetry, Literature and Art
とあつて此の雑誌は二号にて下種々に内変したが四号に
て其の一部分には (図裏ニツヅク)

(十六)

乃て発刊した、今日英文学史研究上の珍書となつて居る、其の（連中の挿画、彫刻、詩、評論を載せたもので）

[illegible]

ロゼチの Blessed Damozel の詩も即

此の第一号に出た。其他一二の詩も此雑誌より引いてみたし

出ておる事、

— The endeavour held in view through-out the writings on art will be to encourage and enforce an entire adherence to the simplicity of nature, and also to direct attention, as an auxiliary medium, to the comparatively few works which Art has yet produced in this spirit.

云々と書いて其主張を述べてある。

(十七)

~~月刊~~のバジャーム出版ではずして作れる本の絵は Art and
Poetry と改題して、更に又してラファエル前派と云ふ名の下に余り
表面に出る事がなくなつて、而して二年ばかり経つて1852年
頃から非常の人気を博して直ぐ画風が承認せらるると共にR.A.
つなさんとする中にの座を推挽し其程の喜びあり彫刻家ウルナーは
アカデミーの会長の議師になり ミレー翁は遂にR.A.になりし
ロゼッチは此の写書と詩と両方の中写に立止つてかか
画は不識 詩は片手写と云ふ状態で時には女性に出を
送つて不識にも何んだか詩は出来ぬなど云ひ出
してあく、而して四五日ゼッチは画を始めから画を一切展

之は1859年の作で So now the whole Round Table is dissolved と独り感慨が之を泣[illegible]。

(十九)

公に出さぬ方針を取つて居たが其の後の処女作を見れば
この上1857年の[illegible]の Galahad of Mary Virgin
で1858年の作である（1857年作か）此詩は既にロセツチとの
親交も深くになつてロゼチは蒼月的神秘の道に趣き
つて居て、即ち一は其の中古好きの Swinburne好きの神秘
好きの低回又一は其のラスキン[illegible]にも少なからず判然と
ちがふといふ[illegible]情の誇大的低回[illegible]又一は
其の東西伊太利の色を引いてゐると見える色彩[illegible]的、肉
感的低回[illegible]が段々高まりつゝ進んで、詩人とし
ての彼は Jerusalem に Blessed Damozel 外二三の短詩を寄
せし位に身を引いて作詩をなし又一二の雑誌に寄稿

（へ百裏⑧）

しば手しくが携して自らて引止めて去人（ろのみならず見て）

は画とかの方針は画と同じく成つて居る、1860年に結婚

結婚した併し此結婚は 1862年に妻が

死んで不幸なものとなつて、此結婚中に伊太利文学の

翻訳をして The Early Italian Poets を出版して、其中

にはあなたの Vita Nuova の訳もあつて、又ひで自

分の作をも蒐めて一冊にして出版しようとして居る 1862年に

妻は死んで悲しみの余り其原稿を妻の墓に埋めて、

そうして非常に後悔して一時はメレヂスやスヰンバーン等と同居して居る、

（十九）

いくらもなくて別れる、 此ろ後が画を成して了仙は 微画

（ような）其子等は Oxford の Union と云ふ倶楽部の壁を書くために此地に行つて始めて Burne-Jones と William Morris との二人の青年に出会つたのであるし此終中に後の有名な Aesthetic movement の発起人でロゼッチも之れに引入れられたに至つたのであるが Swinburne も此時に遇つて

で夫の Mary Virgin の初めもして Annunciation とか Dante Drawing an Angel in Memory of Beatrice とか Paolo and Francesca とかの名作が出来た（Dante's Dream とか）1869 年子友人共の勧めに依し殊に原稿を掘り出して出版した（1870年）つが彼の Poems にある。一般の歓迎せられたが 1871 年の末に忽ち失のこるな Buchanan の猛烈な攻撃文 Fleshly School of Poetry と題するものが Contemporary Review に出て（其詩集は之に五校も至った [illegible]）（Thomas Maitland の変名で）此の時已に四十歳神経衰弱で睡眠剤など用ひて居たのが此攻撃で余程一層甚しく

(三十)

せられたり、彼れは Athenaeum 十六号の
で The Stealthy School of Criticism と題して非
難をし其他諸所にも弁難を起して一時文壇の[illegible]と
なりしが併し此等の事も彼は其の詩と画の筆を絶たず
1881年には Ballads and Sonnets と題する第二の詩
集が出で、[illegible]し又四五年四月には[illegible]
1874年には Dante and his Circle と題して前の
早期伊太利詩人と題せしものを改めて更に出版せし
其の後では [illegible] Joan of Arc, Beata Beatrix 等

を処女として Lilith, Aurea Catena, Lady with Fan,
Proserpine, Rosa Triplex, Blessed Damozel,
等数篇を味はねばならず
さて吾人はロゼッチが詩を研究するに甚だおもしろきとして
述ぶる用語に於ては此の世の大であつてブラウニングとの論争
から始めやうと思ふが け のブラウニングの論争は何うにも変
るで目前型であつて当時の英国の文壇の動をなす其の
宅への何のためといふ主と 常識すべからざる
つるもなくブラウニングを常に甚理由は当時ブラウニングが
嫌ふにロゼッチの詩を悪く いつてゐることもいふを又前
(五十二)

(十三)

ミスチセバーンも自分の目じゃない仮面をも彼等を迎へ撃攻したといふ
ことを及び其次の却に文壇ちかの人の書附やしのものを
ハムレットに例つて旅つて中に好もた自分の私があまり世るで
は詩人とも思つて初めのに好い的に挿んであつたといふ点から
であつて、其為に自分ノ今僅りにハムレットを逆することもせんに
Rosencrantz や Guildenstern ノ役は前後 gagging
其點摘落役なのだが若しこを勤めへき役ちから主役と
廻つ自己ち不思議の強みとなつであらう。然うした名や
此の詩壇の内在紙の well-timing gentleman 的大
名の人々が即ちちやうど此等の人をテニソンに比べて見
小ばローゼンクランツやギルデンスターンがハムレットに対する

(苗)

宗うな干係の人々が前面に出て来て大役を出演する
のでせう、能く紛じて付手の人々は忘れ易の役を勤めて
居らぬがさう西の文句でも書いてはありますが、更に精しく
付比較を致して見ると

Hamlet by Mr. Tennyson; Horatio, Mr. Mathew Arnold; Voltimand, Mr. Bailey; Cornelius Mr. R. Buchanan; Rosencrantz, Mr. Swinburne; Guildenstern, Mr. W. Morris; Osric, Mr. J. G. Rossetti; A gentleman, Mr. R. Lytton 以上の諸

で、ブラウニングは子などの役なんぞに出したいものです

(廿四)

かゝる文は各時代に何ふかの右役を勤めたす（はとびある」

といふのが古の文の犯めであり、次の文の如きは "binding

[illegible] oneself by solemn league and covenant to

extol fleshliness as the distinct and supreme

end of poetic and pictorial art" 所謂詩画

同盟として肉感を讃美せんとするの同盟を作つて

とする形親であ[illegible]之を詩としてセ汁が絡文の如

之は "That I may ~~[illegible]~~ nevertheless

, take a wider view than some [illegible]

poets or critics, of how much, in the

material conditions absolutely given to

(卅六)

にせ十二絃すらつかたの修辞は Rashly といふ事が中心の意味であつて意から
分かる肉感を刺戟し肉の聲を上げてといふのがそれである。不道徳と云ふ
意味になる。而して些の肉の聲必ずしも不道徳ではなく却つて精神の美
助けるものであることが見解である。芸術の美に係る精神にある事を及び
彼の論に肉感の声の方ちのあるもの二点には霊と肉異様はなく唯肉
の聲と精神の美とを如何に干係するかと云ふ点が二者の
相異なる事即ち前者は肉は直に精神の表はれであると見、後者は
肉は精神の発現を得ることに見えるのである。而して前者の見解やがて
当時の思想を基として一派無限遍在世界を代表したので
ある。肉が果してよく霊と一致し得るかどうかといふ事は一の大なる問題
で何時の代でも古来九賢の論ずる二つの思想であるが、少なくとも文
藝の世界のみではその二元の調和する、而して実際界では背反するのが恒
りたとりとも調和し得世界を示すのが藝の美である。

(廿七)

さとは近代の思想の一致する者であって、動もすれば肉的方面を強調
に傾けんとする。抽象的の禁慾遁世主義から見る思想は特殊なものと
なって来ては尚更である、故でも肉と霊との一致の何者を認むるの
はロセチと同時代人としてはロセチは肉を強く説き過ぎたことで
のが真の意味の非難の的であらう。ロセチは如何なる
動機から肉を説きすぎたものは霊と不調和となる弊を免れ
るまでの危険を冒したかどうかに至論一はロセチの性格遺伝らしき
肉のからまったのであらうが重要な事は他の一は即ち自己の表現と
その時代思潮を感じて之を表はしたものと見られる。併し
や事実の為に禁慾に埋没せられた主観が之を求めんとする
の努力であって、即ち自己の直接の意識は感情でなくして全然
感情の刺戟を要求する感情をなえさせんとする意識
なきしに感ずる事実をしたやうに感ずる。ともすれば何か斬り強い刺戟

9.

"all the passions and just delights
of the body are declared — to be
as naught if not ennobled
by the concurrence of the soul
at all times." [illegible] (Chamb. [illegible])

(廿八)

毛子ズムの■ かまで 其経 端の 窮 こんど より 例証 之なり

痛快な判断を■するは強い感情の力を要す。けれども情緒の様々なる sincere と手きびしく来る所にては強い判断は肉的に云へば一種現はれ易い、けれど遂に肉的 (情の) 官覚的となるさらに（芸術）■の世界に入って来る■をも承認するのであって

暫くらしてロゼチは肉の声を詩■に求めた、併し其結果はあまりであってか果してよく■主観の如く霊と肉とは調和し得るかどうかに二三ある、彼の肉の声が霊なる肉の声は止まらず即ち上りて或■まで霊化しその姿で却て夫のブラウニングの詩が拡張で大に肉的なりし弁護せられたのの如く 彼の

"The White Rose and Red" の中で

Till with passionate alienation,
Body and brain began to burn,
And he yielded to the breathing,
Burning, blinding, hungering, thirsting

(廿九)

~~Passion~~ felt by beast and men,
And ~~to~~ his eyes caught love and ~~rapture~~,
And he held ~~her~~ her close in capture,
Kissing lips that kissed again."

とよ類のいつはぶしてまい　ロセチの作は昂上してゐる、而して其昂上した
所は少なくとも~~感~~情緒にはなつてゐる、彼の詩は~~接~~熱烈な肉感ともいふべき~~感~~
熱烈な情緒まで達してゐる、只其情緒といひ得る所まで
来た(接近)だけで停止し一歩を進めて情緒が更に何物かを生み出すことをせぬ
ぬことに至つて論となる、此から余は二通あるといふのである、即ち一通は
斯かる意味での肉と其上の霊とは不調和であつて、情緒はたゞに
情緒にのみ止つて(人には自不安乃至情緒と絶望とかの感を起すまで)ロセチの詩は霊的又は宗教的方面は
たゞ~~気~~として其上に附加せられたる意味となる、而して此の場合
の暴もろい例は　乃至　を利用する

(卅)

さらなる（絵では Girlhood of Mary の花なる[illegible]の[illegible]

き花で舞児を擁したり（衣の[illegible]）模様で三角形の上に設けてあるのはすこぶる甚

だしいが然しながら前のものとは子を標しやうとする彼の詩の形の中に國

（却て一方には情緒はたゞ人為の情緒として残す メーリーに帰し人事と為る）

の Girlhood of Mary を[illegible]あつて[illegible]を説明して居るなどは甚好例の一つ（標気）

Blessed Damozel の如きもその例 之に他の一面ある調和したる

は如何とすれば彼の詩は絵画的色彩となつて居る即ち彼の詩

畫では如何なる形で此肉と霊の安排とか調和せしめたか

霊肉の利義から強い情緒となりはせぬか[illegible]

なした深い[illegible]の二つとして並存し得ればこそ情緒の熱力で

直接にならずして居るので情緒が瞑想を呼ぶ階級は空想されて

少説明せられて居ぬ。[illegible]は直接なるとてとすると

例へば Parted Presence ノ如キ詩デ

To-day your lips are afar,
Yet draw my lips to them, love,
Around, beneath, and above,
So frost to bind and to bar;
But where I am and you are,
Desire and the fire thereof.
O kiss me, kiss me, my love

ト云フ點ハ前ノモノト同ジク詩的デアル

(卅)

が文彼の作の特色とせられる所にて要である。言はゞ彼の作は
情が勝らずんば写実の直視の臆表が出てゐて中間に理想的臆表
が在い直感的である。何の於いてか文は自然神秘的といふ色を帯
びてゐる direct 即 たる所以である。情緒といふものが甚だ鳴を静
めて自己を殺して深い神秘な暗い面をもつを現はさんとしてゐる
感を人に與へる。濃厚な情でありながらかへつて静的な情緒を
してゐる中に思はれるのである。
夢の中でみる物が鮮やかなめくになる
が出てまわる三が彼の作の中心の特色で文味であると思ふ、絵
では彼の婦人の顔の首をかしげて情に沈んだやうな表情をしてゐるあの
型 中にも パオロ、フランチェスカのそれは何よりも最もよく画面調和の妙

説明の例

— the pose of the head and preoccupied, rapt expression peculiar to the listener to sounds inaudible to others; — the stillness of anxious silence; the straining not to miss; a kind of momentary suspense in the midst of intense emotion. (Hueffer P. 60)

之が為め一方には解し得ない人(同じ趣味同感に乏しき)人には表面ばかり見えるから浅薄な感傷的なものと

も見らるゝ [illegible] affectation とか exaggeration とかは

其等の誤解 [illegible] の評

[illegible]

Resting content in the contemplation of mystery, without any irritable straining after certainty and system. (Chamb. III P. 683)

(廿二)

の様な[illegible]情緒をよく表はして居ると思ふ。詩では Blessed Damozel などに

此の諸特質を最も完全に表はし[illegible]もあれば白[illegible]もあり而も

天人の[illegible]に対する[illegible]の[illegible]的[illegible]な[illegible]肉体の調子に

出て而して[illegible]の色、[illegible]の色も十分に出て居る。又[illegible]の最も人[illegible]

[illegible] The House of Life と云ふ[illegible] Sonnets の中にも[illegible]

色は見える。所謂 Seal of tragic fate が[illegible]に現はれると、

其の[illegible]が[illegible]ないが、其他[illegible]の特色は例のラファエル前派と[illegible]味

の[illegible]の上で[illegible]化[illegible]特色[illegible] sincere feeling とまさしく写実との[illegible]

は却って[illegible]かつて[illegible]に[illegible]の極端を示した

[illegible]で[illegible]が、稍遠って[illegible]ではあらはれ[illegible]即ち甚[illegible]の

実に[illegible]自然に[illegible]とは[illegible]が[illegible]せよ

[illegible]も[illegible]れば[illegible]又個々[illegible]別[illegible]描

(廿三)

す~~〔抹消〕~~姫とすさと其の特色である、詩では即ち Blessed Damozel の足から花の香り空想的に悦惚に寫して一團になりますもし
絵のやく並べられて美しいと云ふ気味になつて居るのが絵様 picturesque と云ふ語は之れから来る色が失かされずに実々せられると云ふ気味の美しさである 又 Sonnets 乃至 Ballads 或るものはテニスンなどー並べて十九世紀の名手の一人である、又短い物語り詩の類にも濃厚な感情の力がよく見出されて傑作が多い A Last Confession とか Sister Helen とか The King's Tragedy とか Eden Bower とか The White Ship とかの類がそれである (Blessed Damozel を抄訳する)